

鶴岡高専における主権者教育の取り組み事例報告

政治参加の状況と模擬選挙から見たジェンダー・ステレオタイプの影響

薄葉 祐子

(Received on Jan.31,2020)

1. はじめに

2015年6月、公職選挙法等の一部を改正する法律が成立し、選挙権年齢が「満20歳以上」から「満18歳以上」に引き下げられた。鶴岡高専（以後「本校」）では2016年より、本科3年生（以後「3年生」）の主権者意識を高め、かつ選挙権行使を促すために政治参加講座を毎年実施している。

本稿では、はじめに主権者教育および第25回参院選における3年生の投票率についての報告を行い、次にジェンダー・ステレオタイプが模擬選挙に及ぼす影響を確認するため4年生を対象に実施した調査結果の報告を行う。

2. 鶴岡高専の主権者教育の取り組み

(1) 授業「政治・経済」における取り組み

本校3年生必修「政治・経済」の授業では、「選挙のしくみや政治参加の意義を理解する」ことを目的とし、教科書や資料集、ならびに政治や選挙等に関する高校生向け副教材等『私たちが拓く日本の未来』（総務省・文部科学省）を用いて選挙制度や選挙の課題などを学習している。また、政治参加の意義については、「若年者の政治無関心は高齢者向けの政策優先につながり、自分たちが求める支援・法制度の実施が後回しになるため、若年者の生活に不利」であることを、新聞記事などを題材にして重ねて説明している。

(2) 政治参加講座・模擬選挙の実施

2019年度は、2019年6月19日に主権者教育の一環として「政治参加講座」を企画し、模擬選挙（設定：模擬鶴岡市長選挙の期日前投票）を実施した。

模擬選挙は実際の選挙の流れと同様、選挙（模擬選挙）の公示、選挙運動、投票、開票、開票結果発

表の順に行った。公示は「政治・経済」の授業中に行い、選挙運動として教室に立候補者ポスターと選挙公報の掲示を行った。立候補者および選挙公報は架空のものであるが、選挙公報の内容は2018年10月15日投票の鶴岡市長選挙時の公報に類似した内容を設定した。理由は過去3回の模擬選挙のアンケートで寄せられた、選挙公報が現実に即していないという指摘を受け、改善したものである。

模擬選挙の実施は山形県鶴岡市選挙管理委員会の協力を得て、講演資料、実際の選挙で使用する投票用紙の提供、記載台、投票箱の貸出を受けた。

当日は3年生全員を一堂に集め、政治参加の意義を説明するとともに、模擬鶴岡市長選挙投票所入場券を配布し、投票所入場券裏面の期日前（不在者）投票宣誓兼請求書の確認および記入を行わせた。学生は受付で投票所入場券を名簿対照係へ渡したのち、投票用紙配布を受け、記帳台にて記入し投票箱へ投票を行った。開票は教員が行い、開票結果は「政治・経済」の授業時間に発表し、講評を行った。

3. 政治参加講座・模擬選挙の結果

模擬選挙に参加した3年生の人数は153名で、投票結果のうち、立候補者名が正しく記入していない票が2票、無記入が1票あった。

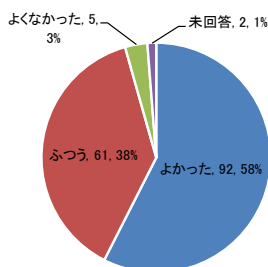
模擬選挙に関する事後アンケート調査では模擬投票の感想について約6割が「よかった」と回答している（図1）。「実際の選挙のような雰囲気を感じることができた」、「本実際の投票形式を知ることができた」、「10月に選挙があるのでこのような場を設けてもらってありがたかった」、「実際に投票するときに慌てずに済みそう」、「政策について考えるのはもちろんのことですが、実際に投票することで、手順など、教科書だけでは理解しきれないこともできてよかったと感じる」などの感想が挙げ

られた。

一方で「よくなかった」という回答者5名からは、その理由に「実際に演説を聞いていないため本当にその人でいいのか不安だった」、「わざわざ模擬選挙をしなくても投票できると思った」、「公約がまともなのがあまりなかった」、「どの候補者も公約が具体的でない、あんな適当では模擬とはいえやる意味がない」という意見が挙げられた。公約は選挙公報に示した内容で、本模擬選挙では実際の公約にほぼ近い内容となっていたが一部批判があった。

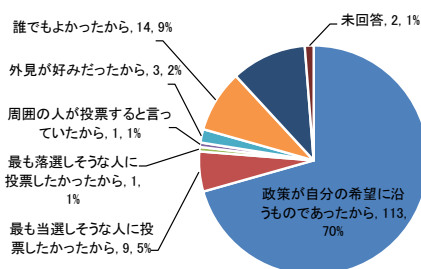
投票理由については、「政策が自分の希望に沿うものであったから」が約7割を占め、掲示した選挙公報を参考にしたことが伺える(図2)。

図1 模擬選挙の感想



資料出所：筆者作成

図2 模擬投票であなたが投票した理由



資料出所：筆者作成

4. 第25回参院選における学生の政治参加

2019年7月21日の第25回参院選に投票に行ったかどうかを問う「第25回参院選政治参加アンケート」を、同年7月23日～26日にMicrosoft Formsを用いて実施した。回答者144人中、選挙権年齢に達していた学生は51名¹(35.4%)、選挙権年齢に達してい

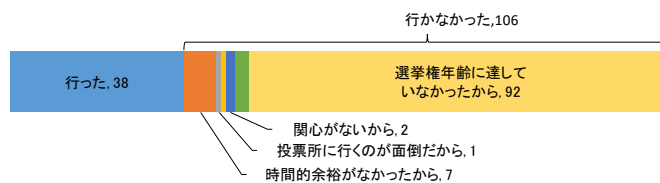
¹ 選挙権年齢に達しているかを問う設問に未回答者が1名いたため、回答者数と合計人数が一致しない。

なかった学生は92名(63.9%)であった(図3)。

選挙権年齢に達していた学生51名のうち投票へ「行った」と回答した学生は38名(74.5%)で、「行かなかった」と回答した学生は13名(25.5%)であった。アンケートから本校3年生(回答者144名)のうち、選挙権年齢に達していた学生の投票率は74.5%であった。

第25回参院選における全年齢層の投票率は、全国48.8%(総務省選挙部2019)、山形県62.31%(山形県選挙管理委員会事務局2019a)であった。18歳の投票率は、全国35.62%(総務省選挙部2019)、山形県42.95%(山形県選挙管理委員会事務局2019b)であるなか、本校3年生のうち18歳に達していた学生の投票率74.5%は極めて高い結果と言える。

図3 2019年7月の参議院議員通常選挙に投票に行きましたか？



資料出所：筆者作成

5. ジェンダー・ステレオタイプの影響

本節では模擬選挙におけるジェンダー・ステレオタイプの影響について述べる。ジェンダー・ステレオタイプとは「『男は仕事・女は家庭』に代表されるような、男性と女性に対して人々が共有する、構造化された思いこみ(信念)」(青野・森永・土肥2004:27)で、人々の行動に影響を及ぼすことが報告されている。例えば「政治家=男性的」、「リーダーシップ≠女性的」などのステレオタイプが、女性候補者への投票を妨げることが指摘されている(尾野2018)。

3年生対象の模擬選挙の立候補者は3名で、内訳は男性2名(山田太郎、高橋良雄)、女性1名(はら優子)であった。投票結果は、山田太郎 75票、はら優子 48票、高橋良雄 27票、名前以外記述が2票、白紙が1票で、山田太郎が過半数を獲得した(表1)。

選挙公報の政策は架空のものではあるが、山田太郎とはら優子の政策内容は過去の鶴岡市長選挙で示され、鶴岡市の抱える課題の解決をうたったもので、双方とも現実的な政策を模した内容であった。高橋良雄の内容は過去に他市の市長選挙で掲げられた政策を模した。政策に差があるとしたら、どれだけ具体性が盛り込まれているかという点である。

実際、高橋良雄の政策には具体的な内容を盛り込まなかったことから、3年生の支持が得られず、獲得した票数が少なかったものと思われる。

事後アンケートでは、学生の多くが政策を重視して投票したと回答(図2)しているが、過去3回の3年生対象の模擬選挙で3回とも男性が当選という結果を鑑み、山田太郎が過半数を獲得した要因を推測した。その要因として、山田太郎という氏名が親しみやすい、書きやすい、本校の教員を連想させる、男性であることなどが考えられたが、その中でも「政治家＝男性的」というジェンダー・ステレオタイプの影響が強いのではないかと推測した。

そこで、本科4年生(以後「4年生」)に対しても同様の調査を行い、3年生の投票結果はジェンダー・ステレオタイプの影響なのかを検討することにした。調査にあたり、上記で推測した要因をできる限り排除し、先入観を持たせない工夫を施した調査票を作成した。具体的にはポスターイラストを外し、氏名、性別、年齢、政策だけを記載した選挙公報に編集し直した。氏名も本校の教員を連想させないように変更した。さらに、候補者要件を2つ設定し、グループ1では「候補者は全員男性」、グループ2では「候補者は男性2名、女性1名」という設定のもとで模擬投票を行わせた。グループ2の女性候補者は、グループ1の男性「中田ひろき」の政策内容・配置はそのままに、性別・氏名を女性「中田まりこ」に変更した(表1)。投票方法は、用紙上部に性別、投票欄を設けた選挙公報を配布し、政策をよく読んでから選択するように指示したのち、該当箇所に✓を記述させ、回収した。

グループ1の模擬投票結果は、鈴木さとし 28票、中田ひろき 33票、はやし郁太郎 16票であった。候補者全員が男性であることから、年齢と政策内容で評価された結果、中田ひろきが一番票を獲得している。一方、グループ2の模擬投票結果は、鈴木さとし 28票、中田まりこ 18票、はやし郁太郎 25票であった。「中田まりこ」は先のグループ1で最多票を得た「中田ひろき」を女性設定に変更しただけであったが、中田まりこの得票数が最も少なかった。候補者要件の違いは性別のみであることから、中田まりこが女性であったため支持が低く、はやし郁太郎に票が流れたことが伺える。

以上、性別の違いで獲得票数が異なり、女性候補者が選ばれにくい状況が確認できたことから、3年生および4年生の模擬選挙の結果は、ジェンダー・ステレオタイプの影響を受けたものと言える。

6. まとめ

はじめに、第25回参院選政治参加アンケートから、本校3年生のうち18歳に達していた学生の投票率は74.5%であり、全国平均と比較して高い結果が示された。しかし、前回の第24回参院選と比較すると18歳の投票率は大幅に下落しており、全国では51.28%(総務省選挙部2016)から15.66ポイント、本校3年生では87.5%(薄葉2016)から13ポイント下落している。3年前の第24回参院選では、選挙権年齢が18歳以上に引き下げられてから初めての国政選挙として注目を集めたが、徐々にその盛り上がりも失われ、投票率が低下傾向にあることが懸念されている。文部科学省が2015年に出した「高等学校等における政治的教養の教育と高等学校等の生徒による政治的活動等について」という通知では、高校生への政治的教養を育む教育の積極的な実施をうたっている。しかし、教育現場で政権や政党の現状について議論したいと思っても、教員は「公正中立な立場で」の教育が求められる以上、特定の政党や立候補者の政策を取り上げるところまでは踏み込めない。政治的中立を図りながら、かつ積極的な主権者教育には課題が多い。

次に、3年生、4年生の模擬選挙の結果はジェンダー・ステレオタイプの影響を受けたことが確認できた。政治分野への女性参画は、持続可能な開発目標・SDGsの目標5「ジェンダー平等を実現しよう」の達成との関連も強く、女性をあらゆる場面の意思決定の場に参画させることは日本社会の喫緊の課題となっている。政治分野に限らず『「男の仕事」というステレオタイプをもたれている分野で活動する女性たちは(中略)ことあるごとに逆風にさらされている』(Bohnet 2016: 29)ことが指摘されている。本校を卒業する学生がジェンダー・ステレオタイプの影響により活躍を制限されたり、あるいは他者の活躍を阻害することがないように、ジェンダー平等教育の必要性を感じている。本校では現時点でジェンダー平等教育に関する授業時間は設けられていないため、政治・経済の授業・単元と関連付ける形で、学生に対しジェンダー・ステレオタイプが無意識に重要な意思決定にまで影響を与えることや、その影響を排除する仕組みづくりの重要性を伝えたいと考えている。

表1 対象グループごとの設定条件と投票方法・ポスター・投票結果と考察

対象者グループ	設定条件と投票方法	ポスター	投票結果(票)と考察
3年生	<p>設定条件: 候補者は男性2名、女性1名 ポスターイラスト記載あり 年齢記載なし 性別記載なし ポスターイラストと男性名・女性名で性別を判断</p> <p>投票方法: 投票用紙に候補者名を記述</p>		<p>投票結果: 山田太郎 75 はら優子 48 高橋良雄 27 名前以外記述 2 白紙 1</p> <p>考察: 山田太郎が過半数を獲得した要因として、名前が親しみやすい、書きやすい、本校の教員を連想させる、男性であることなどが考えられた。</p>
グループ1 4I・4M	<p>設定条件: 候補者は全員男性 (性別バイアスを除外) 候補者氏名は3年生アンケートと異なる (本校教員を連想させないように変更) 政策は3年生、グループ2と同内容 政策の配置はグループ2と同じ ポスターイラスト記載なし 年齢記載あり 性別記載あり</p> <p>投票方法: 選挙公報上部に回答者の性別、投票欄を設け、該当箇所には☑を記述させたのち、選挙公報を回収</p>		<p>投票結果: 鈴木さとし 28 中田ひろき 33 はやし郁太郎 16</p> <p>考察: 候補者全員が男性の場合、年齢と政策内容で評価された結果、グループ1では中田ひろきが一番票を獲得している。</p>
グループ2 4B・4E	<p>設定条件: 候補者は男性2名、女性1名 候補者氏名は3年生アンケートと異なる (本校教員を連想させないように変更) 候補者氏名は3年生およびグループ1と異なる (「中田ひろき」を「中田まりこ」に変更) 政策は3年生、グループ1と同内容 政策の配置はグループ1と同じ ポスターイラスト記載なし 年齢記載あり 性別記載あり</p> <p>投票方法: 選挙公報上部に回答者の性別、投票欄を設け、該当箇所には☑を記述させたのち、選挙公報を回収</p>		<p>投票結果: 鈴木さとし 28 中田まりこ 18 はやし郁太郎 25</p> <p>考察: 政策内容および政策の配置はグループ1と同様。「中田まりこ」は先のグループ1で最多票を得た「中田ひろき」を女性設定に変更しただけであったが、中田まりこの得票数が最も少なかった。候補者要件の違いは性別のみであることから、中田まりこが女性であったため支持が低く、はやし郁太郎に票が流れたことが伺える。</p>

4Iは4年情報コース、4Mは4年機械コース、4Bは4年化学・生物コース、4Eは4年電気・電子コース。

出所：筆者作成

参考文献

- 青野篤子・森永康子・土肥伊都子（2004）『ジェンダーの心理学改訂版「男女の思いこみ」を科学する』ミネルヴァ書房
- Bohnet, Iris（2016）“What Works : Gender Equality by Design”, Belknap Press: An Imprint of Harvard University Press（池村千秋・大竹文雄訳（2018）『WORK DESIGN(ワークデザイン):行動経済学でジェンダー格差を克服する』NTT出版）
- 尾野嘉邦（2018）「ジェンダーステレオタイプと有権者の投票行動」<http://www.law.tohoku.ac.jp/research/thg/ono.pdf>（2020.1.15）
- 薄葉祐子（2016）「鶴岡高専における主権者教育の取り組み事例報告「政治参加講座」を受講した学生のアンケート調査より」『鶴岡工業高等専門学校研究紀要』第51号, pp. 12-14
- 総務省選挙部（2016）「第24回参議院議員通常選挙における年齢別投票状況（抽出調査）」
http://www.soumu.go.jp/main_content/000440121.pdf（2017.1.4）
- 総務省選挙部（2019）「第25回参議院議員通常選挙における年齢別投票状況（抽出調査）」
https://www.soumu.go.jp/main_content/000646950.pdf（2020.1.20）
- 山形県選挙管理委員会事務局（2019a）「第25回参議院議員通常選挙 選挙結果のお知らせ」https://www.pref.yamagata.jp/ou/910001/senkyokekka/R1saninsen_senkyokekka/r01sanse_touhyoukekka.xls（2020.1.20）
- 山形県選挙管理委員会事務局（2019b）「第25回参議院議員通常選挙 18歳・19歳の投票率（全数調査）【山形県】」https://www.pref.yamagata.jp/ou/910001/senkyokekka/R1saninsen_senkyokekka/r1saninjudai.pdf（2020.1.20）